

技術教育研究会と私の歩み

①

佐々木 享

まえおき——連載を始めるに当たって

私たちの技術教育研究会は、1960年1月15日に創立された。したがって今日ではすでに40年近くの歴史をもつに至った。現在の技術教育研究会には、原正敏、幡野憲正の両氏や私などの創立以来の会員も健在である。しかし創立の頃はまだ生まれていなかった会員もいるくらいだから、大部分の会員にとっては、40年前といえかなりむかしのことで、すでにひとつの歴史であろう。こうした事情を考慮して、技術教育研究会の歴史を、私の歩みと重ねて述べてみる。

民間教育研究団体は、どこでも多かれ少なかれそうだと思うられるが、私たちの技術教育研究会においても事務局長を中心とした事務局が常任委員会や運営の中核を支えている。私が事務局長を勤めたのは1970年8月から1976年8月までの6年間だから、ここでは、技術教育研究会についてはこの時期を中心に述べることになる。しかしこれ以前についても、いまでは全く事情を知らない人が多いことを考慮して、『会報』第251～262号に連載された原正敏先生の文章とは重なる部分があることを承知で、私自身の歩みにそって述べることをお許しいただきたい。

技術教育研究会の創立以前の私

私は、いまから40年以上前の1956年3月に東京都立大学(工学部工業化学科)の夜間課程を卒業して中学校の教師になり、「職業・

家庭」のうちの「職業」を担当することになった。不況で会社に就職する道がなかったので教師になった典型的なデモ教師だった。東京都の教員採用試験の成績は悪くて「B」という判定だったのに、「工業」を専攻していたということで都内のあちこちの中学校から誘われ、大学のゼミの1年先輩の津村誠氏に勧められ、同氏が勤めていた目黒区立第六中学校に勤め始めた。敗戦後、まだ10年程の頃のことで、中学校の施設設備はひどく粗末であったが、学校には自由の空気があり活気が漲っていた。ちなみに教員採用試験に「B」と判定された一因は、『学習指導要領』というものを私が知らなかったことにあったことが後に分かった。

ずっと後になってから、技術教育研究の先達のひとりである清原道寿氏、後に長く文部省にいて「技術・家庭」に大きな影響力をもった鈴木寿雄氏もむかしこの目黒区立第六中学校に勤めておられた奇縁を知った。

私が勤務した中学校の当時の「職業・家庭」は、男子だけの「職業」と女子だけの「家庭」に分かれた時間と、男女共学の時間とで構成していた。私が担当したのは、男子だけの「職業」の時間である。ただし2年目からはホームルーム担任になったため、自分の学級だけは男女共学の時間も担当した。私は高校は定時制の機械科の出身で、大学では工業化学を学んだから、男子対象の時間の教材研究は困らなかったが、男女共学の時間は、それまで全く学んだことがない栽培や簿記だったから、これには閉口した。自分も学びながら

教えるほかはなかった。その意味で、当時の生徒たちには申し訳なかったと思う。

再び夜学に

後に鹿児島大学で教育学の教授となり、1996年3月に定年退官された岡本洋三氏は、工学部の私の1年先輩である。その岡本洋三氏の影響で大学を卒業する少し前から関心を持ち始めた近代技術史をもう少し勉強したいと思い、歴史の大学院を受けたら落ちたので、中学校教師に在籍のまま、人文学部歴史学専攻に学士入学した。とはいっても真面目に学問に熱中したわけではなく、すぐ後で述べるように、1958年の東京都教職員組合の勤務評定反対闘争の頃は都教組目黒支部の執行委員として闘争の渦中であつたし、これに続いた安保闘争では毎晩のデモに参加することが忙しく、大学に通うのは容易ではなかった。

都教組目黒支部の執行委員となる

中学校教員3年目の1958年に、東京都教職員組合目黒支部執行委員に選出された。執行委員といっても、授業を24時間、しかもホームルーム担任ももったままだから、条件は厳しかった(1958年の学習指導要領改訂以前は、中学校でもホームルームと称していた)。

私は、労働組合役員の経験は初めてではなかった。工学部学生の頃、1952年から1956年3月まで、昼間は通産省の外局である工業技術院傘下の東京工業試験所に下積みの助手として勤めていた時代に、職場の学習活動に参加し、やがて全商工労働組合東京工業試験所分会の青年婦人部の執行委員や、全商工労働組合関東信越支部の青年婦人部長に選出されて活動するなどの経験をもっていた。(初

台にあつた東京工業試験所は後に筑波学園都市に移転し、その跡は国立劇場になった。)4月23日の全1日のストライキ闘争には、私の所属する目黒支部は脱落したが、私の目黒六中分会は私の意見を容れて敢然と突入した。

教育研究問題への開眼

たまたま1958年の中学校学習指導要領の全面改訂に遭遇し、「職業・家庭」に代わって「技術・家庭」という教科が設置されることを知った。『学習指導要領』というものを知らないで教員採用試験を受けた私も、この頃には仲間に教えられて『学習指導要領』の影響の大きさを知ようになっていたから、初めて教育問題への関心に目覚めた。同じ職場に、教科は違っていたけれども科教協(科学教育協議会)、歴教協(歴史教育協議会)、地理教育研究会などの民間教育研究運動に参加して人がいたので、その人びとの手引きで職場の学習会に参加し、少しずつ教育問題に関心を持ち始めた。いま考えると、素晴らしい友人に恵まれた珍しい職場だった。

教職員組合の教育研究集会に初参加

1959年の秋、都教組目黒支部の教育研究集会が開かれた。私は、1958年の中学校学習指導要領の全面改訂により新設された「技術・家庭」という教科は、不十分な点が多いけれども重要な教科であるから、これを拡充すべきだと思うという趣旨のつたない報告書を提出した。しかし、目黒支部では「職業・家庭」の分科会は司会者と私以外には参加者がいなかったために成立せず、私は全都の東京都教連の集会の「職業・家庭」の分科会に直接に参加した。(続く)